

現在の私たちが、小学校で習う「ひらがな」は46文字(「ゐ」と「ゑ」)^(※)を加えても48文字)ですが、これは明治時代^{めいじじだい}になって、一音につき一文字に統一されたものなのです。そして、この統一された「ひらがな」以外の字体の文字を「変体仮名^{へんたいがな}」といっています。私が手元に持っている「くずし字辞典」には、かな編として322文字ものひらがなが挙げられています。しかも、くずし方、簡略化のしかたによって、同じ漢字が元になっているとは思えない文字もたくさんあります。つまり、明治以前の人々は、私たちの何倍もの文字の形を覚えていないと、かな書きの文章でも読めなかったのです。

そんなわけですから、現在の私たちにとって、古文書に書かれているくずし字は外国語のようなもので、これを読めるようになるためには、まずは変体仮名を少しずつ覚えていく必要があります。ただ、比較的よく使われる変体仮名は、ある程度限られていますのでそこまで恐れる必要はありません。古文書によく登場する変体仮名をダウンロードできるようにしていますので、古文書を読む際には、お手元において参考にしてみてください。

※「ゐ」は50音表では「わ行い段」、「ゑ」は「わ行え段」に位置する文字ですが、現在はあまり使われることはありません。「ゐ」は「い」、「ゑ」は「え」と同じように発音されています。

次回予告 「変体仮名」を読んでみよう